

# NUAL

名古屋大学全学同窓会  
NAGOYA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION

# Newsletter

No.11 平成 21(2009)年 3月

NUAL (ニューアル) は Nagoya University Alumni Association の略称です。



## Contents

- 特集1 本学関係者3名が  
2008年ノーベル賞を受賞 ..... 2  
2008 Nobel Prize Awarded to Three Researchers  
with Ties to Nagoya University
- 特集2 平野総長インタビュー ..... 4  
Interview with the President, Professor Hirano

- 同窓会ニュース ..... 6  
NUAL News
- 大学ニュース ..... 14  
Nagoya University News
- 事務局からのお知らせ ..... 16  
From the NUAL Office

(中央) ノーベル財団レセプションの様子  
(左上) 左から 小林博士、益川博士、下村博士、平野総長

2008年10月、名古屋大学ホームカミングデイの準備が進められる中、本学関係者3名の2008年ノーベル賞受賞決定の知らせがキャンパスを駆け巡りました。受賞決定当時の様子から、授賞式や関連行事の様子をお伝えします。また、今年度で5年の任期を終えられる平野総長に同窓会にまつわるエピソードや将来への期待を語っていただきました。

It was October 2008, in the middle of preparations for the Fourth Nagoya University Home Coming Day, when the historic news rippled through the campus: it had been decided to award the Nobel Prize to three researchers with their academics roots at Nagoya University. Here we report on the events related to the awards. There is also an interview with Shinichi Hirano, whose five-year term as president of Nagoya University comes to an end in March. He will relate some memorable episodes about the association and offer some thoughts on its future.



ホームカミングデイでのノーベル賞受賞記念展示の様子

# 本学関係者3名が2008年ノーベル賞を受賞

## 2008 Nobel Prize Awarded to Three Researchers with Ties to Nagoya University

スウェーデンの王立科学アカデミーは、10月7日（火）、2008年のノーベル物理学賞を本学の卒業生である益川敏英名古屋大学特別招へい教授・京都産業大学理学部教授、小林 誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授ら3名に贈ると発表しました。両氏の受賞理由は「クォークが自然界に少なくとも三世代以上ある事を予言する、対称性の破れの起源の発見」です。両氏は1972年、物質を構成する基本粒子「クォーク」が6種類あれば、「CP 対称性の破れ」が説明できるという「小林・益川理論」を発表し、1995年に6番目のクォーク「トップクォーク」が発見されたことで、この理論の正しさが証明されました。「CP 対称性の破れ」の説明を試みる数多くの理論の中で、小林・益川理論は、最も美しく無駄のない理論とされ、今日の「標準理論」の基礎となっています。

益川博士は、昭和37年に本学理学部を卒業、昭和42年に本学大学院理学研究科博士課程を修了した後、理学部助手、東京大学原子核研究所教授、京都大学基礎物理学研究所教授等を経て、平成15年から京都産業大学理学部教授、平成19年10月からは本学特別招へい教授に就任いただいています。

小林博士は、昭和42年に本学理学部を卒業、昭和47年に本学大学院理学研究科博士課程を修了した後、京都大学理学部助手、高エネルギー物理学研究所教授、高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所長等を経て、平成18年に同機構名誉教授になられています。

当日、午後7時15分頃、インターネット上に受賞決定が発表されると、報道関係者が待機していた広報室は騒然となり、両博士を輩出した理学研究科では教職員から一斉に大きな拍手と歓声が沸き上がりました。両博士にゆかりのある山脇幸一理学研究科教授の研究室には、多数の報道関係者が集まり、取材が行われました。また、関係する研究者や学生らが集まって、受賞の喜びを分かち合っていました。また、平野総長からお祝いのコメントが出されました。

翌8日には、両博士の受賞を受けて、理学研究科 C 館においてお祝いの垂れ幕が掲げられ、午後4時から、豊田講堂第1会議室において、近藤理学研究科長及び山脇教授の同席のもと、総長の記者会見が行われ、今回の両博士の受賞についての喜びを語りました。



大学院時代の益川博士と小林博士



益川・小林両博士の署名入り色紙（右下）を前に受賞を喜ぶ学生たち（10月7日）



1967年(?) 理学部 E 研(素粒子論研究室)が行った2中間子論25周年記念の職員会館でのパーティー (左から坂田、益川、二宮、湯川)

さらに、同アカデミーは8日（水）、2008年ノーベル化学賞を本学理学部の元助教授である下村 脩 米・ポストン大学名誉教授ら3名に贈ると発表しました。受賞理由は、「緑色蛍光タンパク質 GFP の発見と開発」です。下村博士は、発光するクラゲの中から緑色の蛍光タンパク質（GFP）を世界で初めて発見、精製することに成功しました。この GFP を目印にして、生きた細胞中のタンパク質の振る舞いを直接観察することが可能になり、分子生物学や生命科学の発展に大きく貢献したことが高く評価されました。

下村博士は、本学理学部の研究生として2年半を過ごされ、昭和35年に本学において理学博士の学位を取得した後、同年、米・プリンストン大学にフルブライト留学、昭和38年から本学理学部助教授として2年間在籍されていました。

当日、午後6時50分頃、インターネット上に受賞決定が発表されると、前日に続く本学関係者の受賞に、大学全体が大きな興奮に包まれました。下村博士が理学博士の学位を取得



第3回平田記念レクチャーにて 中央が下村博士、左が上村名誉教授、右が田中尚男愛知教育大学名誉教授（2007年2月6日）



家族達とクラゲを採集する下村博士

し、また助教授として在職した理学研究科には、多数の報道関係者が集まり、午後8時には、総長が同研究科に駆けつけ、近藤研究科長及び遠藤斗志也教授の同席のもと、緊急の記者会見が開かれました。

同日午後10時30分には、吉報を受けた上村大輔本学名誉教授が横浜から駆けつけ、同名誉教授の同席のもと、改めて総長の記者会見が行われました。関係者が見守る中、40名以上の報道陣が出席し、会見後にも多数の質問が寄せられるなど、深夜まで祝福に包まれていました。

その後もノーベル賞受賞の盛り上がりは続き、本学ホームカミングデーでは特別展示が急遽開催されました（14-15ページ参照）。また、博物館では受賞記念特別展が開催され好評を博しています。2009年2月7日には、豊田講堂において、小林・益川博士のノーベル物理学賞受賞を記念した名古屋大学レクチャーが開催されました。平野総長の挨拶と大学院理学研究科山脇教授、杉山教授による素粒子と宇宙進化に関する解説に続き、小林博士による「CP対称性の破れと素粒子の模型」と題した講演、益川博士による「CP対称性の破れが我々に語ったこと」と題した講演が行われました。応募者多数のため抽選で聴講券を手に入れた幸運な参加者は、両博士の講演に真剣に聞き入っていました。なお、2009年3月26日には下村博士のノーベル化学賞受賞を記念した名古屋大学レクチャーも開催され、下村博士ご自身が講演される予定です。





昭和40年に名古屋大学工学部を卒業し、平成16年に総長に就任された平野総長が平成21年3月末に5年の任期を終えられます。任期を振り返って思うこと、同窓会にまつわるエピソードや同窓生・同窓会への将来の期待を語っていただきました。なお、次期総長候補者には濱口道成医学系研究科長・教授が選出されました。詳細は大学ニュース（14ページ）をご覧ください。

### 任期を振り返って

法人化と共に総長を務めて4年9か月になりますが、特に同窓の方々に関係が深いことであれば、豊田講堂の全改修が挙げられます。入学式・卒業式・大学祭のイベントなどで活用されてきましたが、45年たって古くなってしまったので、トヨタ自動車と関連会社の方々のご理解のもとで全改修が叶い、昨年の2月2日に竣工披露ができたことは、私にとっても、同窓の方にとっても重要なエポックではなかったかと思っています。音響効果の改善などで、文化の薫る文化の殿堂にふ



豊田講堂で行われた名古屋フィルハーモニー交響楽団コンサート

さわしいものに生まれ変わりました。また、シンポジオンと一体化ができて入学式・卒業式で学生が全体の建物の中で式に参加できることに加え、学会活動等においても大変利活用しやすい建物になったと思っています。

もう一つ、2008年ノーベル賞受賞者が本学の関係者から3人も出られたということも同窓にとっての大変な励みではないかと思っています。名古屋大学そのものの名前が世界に知れ渡ったという点でも、同窓として嬉しいエポックではないかと思っています。

### 法人化における同窓会の役割

大学が法人化され、学外の方々にはいかに大学の活動をご理解していただくかということが大変重要になっています。大学の役割は教育・研究に加えて社会貢献と言われますが、私自身、大学は社会の中の一員であって、社会貢献というのは何となくおこがましい言い方だかと思います。ですが、大学の活動を皆さんに知ってもらうということで、東京フォーラムやホームカミングデイ等の行事を行ってきています。その都度同窓会の方々にはいろんな意味で支援をしてもらい、本当に感謝しております。

加えて、学生も対象にした同窓会支援事業や、寄付講義による支援をいただき大変ありがたく思っております。同窓会の方々のご協力がなければ法人化後のこれまでの活動もそう簡単に動くものではなかったと思っています。名古屋大学全学同窓会は大学の教職員になられた方もすべて含まれておりますが、私は狭い意味の同窓でもありますので、大変感謝しております。

### 同窓会海外支部の活動を振り返って

国内はもとより、特に海外に行かれた方々とどうやって大学との連携を図るのかということは大変重要であり、難しいことでもあります。幸いにして同窓会の方々の努力で7つの海外の支部を作っていただいたことについては、大変嬉しく思っております。

海外支部の設立総会などには、スケジュールの許す限り参加させていただいております。その各支部の方々全員が、名古屋大学をものすごく愛し、支部設立を喜んでくれており、出席する度に名古屋大学自身ももっとしっかり活動しなければいけないという気持ちが強くなりました。また、中国や韓国など、

私が各国に行くたびに、皆さんが本当に喜んで集まってくれたのも、大変嬉しいことです。

ただし、そのような場で私が会う方たちは、本当に日本をよく理解して好きになってくれている人たちですが、留学経験者の100パーセントがそうとは思えません。やはり経済的に苦勞したり、残念ながら差別的な目で見られたりして、耐えて学んで帰られた人がいることも事実です。そういった人たちの声は聞こえづらいと思います。同窓会の支部を通してでも、必要などころについては今後も大学の活動を伝えていきたいと思っています。この意味でも、さらにいろんな国に同窓会の支部ができることを願っています。また、それぞれの支部がさらに発展することを願っております。

また、30万人留学生といった計画がありますが、留学生を精一杯きちんと育てて、日本へ来てよかったと思ってもらうためにも、名古屋大学基金を設けて、国に頼るだけでなく、みんな教育の場を改善していきたいなと思っています。これが名古屋大学基金を同窓の方々をお願いをしている一つの理由です。

## 名古屋大学基金のお願い

同窓会でも、名古屋大学基金への協力を呼びかけていただき、大変ありがたく思っております。企業の方々にも現在いろいろお願いしておりますが、やはり同窓の人たちのご理解を得て、そして大学で学ぶ若い人たちと一緒に育てていこうという気持ちを是非、大学に寄せていただきたいと思っています。学んだ仲間として、また次の人を育てていこうという気持ちを1人でも多くの人たちが持っていたらというのが基本です。

単に建物等をつくって維持するだけで精一杯という形でせつかくのお気持ちを終わらせるのではなく、やはり基金として運用利息で大事にずっと使わせてもらいたいと思っています。最終的に大きな金額になり、名古屋大学が発展することを望んでおります。もちろん、基金については種々のご批判を私も厳しく受け止めております。今後、これは長い時間をかけてでも、特に次の時代を担う人々を育てる基盤として大切にしていきたいと思っています。総長を辞めるにあたって、名古屋大学基金がまだ十分集まっていないということだけが後ら髪引かれるところです。同窓の方々頼りでもありますので、是非、ご協力をたまわりたいと思っています。

## 同窓生のネットワークづくり

今は個人情報保護法があって名簿を作るのが非常に難しい状況です。やはり、年代ごと、学年ごとにリーダーをしっかりと作ってもらって、同窓の中でネットワークの中樞になって動いてもらうことが必要かと思えます。また、現在多くの同窓の方々が進めている企業では、名古屋大学基金推進の幹事を作るをお願いしています。ありがたいことに会社によっては声かけをその人たちがしてくれて、こぞって協力していただいています。一方で、名古屋大学の方々はまだ村や組のようなものを作らない傾向もあって、その意味では一部の大学より少し組織が弱いということはあるかもしれません。これは悪いばかりでもなく、紳士的ではあるのですが、同窓会の活動を難しくしていることは事実で、もうちょっとと思うところでもありますし、これは大学自身の活動の仕方にもよることだと思います。

## 全学同窓会に期待すること

大学の活動というのは全構成員が一体になって、学内の活動はしますけれども、学外の活動全体では同窓の方々だけでは動きません。同窓会には、社会との重要な架け橋にもなってもらえればありがたいと思います。さきほど言ったように、大学は社会貢献が重要な使命の一つであります。その点においても、同窓会の方々のお世話にもなりながら、大学の活動を伝え、あるいは大学が活動する場にもなっていきたいと思っていますので、同窓会は今まで以上に、大学とよい形で連携を取っていただければと思っています。

特に国内はもとより海外の方々ともよい連携を図りたいと思います。言葉を間違えるといけませんが、大学の立場から見れば、同窓の方々はとても重要な資産です。たとえば、先日、中国科学院からインシュタイン・プロフェッサーとして招かれた際や、タイ、カンボジアなどに出かけた際、各国で政治や司法を含め大変立派な仕事をされている名古屋大学の卒業生に多く出会いましたが、彼らに大学の活動への協力を十分お願いできなかったのは任期を終えるにあたっての反省です。今後、同窓会としてもそういうところにも目をかけて、大学にこういう人がいるということを言うていただき、そのような方がよい形で大学全体の中で活動する場が広がればと期待しています。

(編集委員) 貴重なお話をいただきありがとうございました。

## 全学同窓会第6回総会を開催 The Sixth General Meeting of Nagoya University Alumni Association was held.

第4回ホームカミングデイの開催にあわせ、平成20年10月18日（土）に、豊田講堂において全学同窓会第6回総会を開催しました。総会では、豊田章一郎会長（トヨタ自動車取締役名誉会長）、平野眞一総長の挨拶ののち、大学役員と直前に開催された全学同窓会評議員会において承認された同窓会役員、支部役員の紹介がありました。役員任期は2年で今年ちょうど改選の年でしたが、多くの役員が留任し、引続き活動していくこととなりました。

また、ホームカミングデイには、前回同窓会総会以降に設立された海外支部の役員をお招きしており、北京支部からは北京支部長の潘偉先生（清華大学教授）ご夫妻、ベトナム支部からは国連開発計画勤務の Li Thi Nam Huong さん、カンボジア支部からは、The Leopard Capital Co 勤務の Tep Vichet さんにおいでいただきました。

3人を代表して、潘偉北京支部長からごあいさつをいただ

きました。潘支部長は、ホームカミングデイに招待されたことに謝意を述べられた後「北京支部は現在85名の会員がおり、様々な分野で活躍している。今年3名の名大関係者からノーベル賞受賞者がでたことを皆誇りに思っている。今後も更に研究・教育面で交流し、日中友好の架け橋になりたい」と挨拶がありました。

続いて、伊藤義人代表幹事（附属図書館長）から、①同窓会の財政基盤として育ってきている名古屋大学カードへの加入のお願い、支援会費のお願い、②寄附講義キャリア形成論を今後も3年間支援することなどが報告され、総会を終了しました。

当日は、大学や全学同窓会の呼びかけに応え、各学部・大学院においても同窓会関係行事が行われ、国際言語文化研究科同窓会及び環境学研究科では同窓会発起・設立準備式が開催されました。

## 全学同窓会の近況と課題



名古屋大学全学同窓会代表幹事  
伊藤 義人  
昭和50年工学部卒、昭和52年修士修了  
名古屋大学附属図書館長

名古屋大学全学同窓会が平成14年10月に創設されて6年半が経過しました。全学同窓会が設立時の理念として掲げた「大学と社会を結ぶ必須の組織」という新しい機能を持った同窓会を目指してきました。そのため、卒業生・修了生だけでなく、現旧教職員など名古屋大学関係者すべてを会員とする組織としています。平成20年には、3名 of 全学同窓会会員（益川先生、小林先生、下村先生）が、ノーベル賞を受賞され、野依先生を含めると、4名の会員がノーベル受賞者という同窓会になっており、先輩方の活躍をお祝い申し上げます。

これまでに、全学同窓会は、寄附講義（キャリア形成論）、公募形式の大学支援事業、学生支援、同窓会カード事業、ニューズレター発行など種々の活動を行ってきました。大学と一緒に、卒業生・修了生への情報発信や講演会・シンポジウム開催など種々の活動も行ってきました。まだまだ多くの課題を抱えており、最近の全学同窓会の近況と課題について簡単に報告いたします。

平成20年度までに、国内は関東支部、遠州会、関西支部の3支部ができ、海外支部として韓国、上海、タイ、バングラデシュ、北京、ベトナム、カンボジアの7つを創設しました。立ち上げについては、卒業生・修了生だけでなく、関係者に変なお世話になり実現いたしました。特に、帰国された卒業生・修了生からは絶大な支持を得ており、名古屋大学の国際交流の

拠点ともなっていると思います。今後、ヨーロッパやアメリカなども含めた対応、大学と共同した支部の維持活性化が課題です。

財政基盤の整備は、全学同窓会創設からの大きな課題です。現在のところ、物心両面で支えていただける支援会員の会費、新入学生の保護者からの活動協力金、寄付金およびカード事業によっています。支援会員の数は1000名を切っており、その拡充が大きな課題です。一方、名古屋大学カードを平成19年から始め、これが全学同窓会の財政基盤の一角を構成するように育ちつつあります。現在、約2500名（家族カードも含めて約3000枚）の方々が既に、カードを所持されています。入会手数料とカード売り上げの0.2%が同窓会に入り、大学支援の資金としています。当面の目標として、1万人の会員の方々にカード会員になっていただきたいと思っています。年会費は永久無料で、カード特典はもちろん所有者に行きます。所持して使っていただくだけで大学支援に貢献できますので、是非ともお申し込みください。

また、部局同窓会の協力を得て、基本的な名簿を整備して、インターネットによる住所変更も可能なシステム（社会貢献人材バンク）を稼働させています。しかし、個人情報保護法の施行後、十分に卒業生・修了生の把握が困難になっており、今後、全学同窓会の電子名簿を大学に移管して、大学自らが管理して、卒業生・修了生と協力できる体制を作ろうとしています。

国立大学は、平成16年から中期目標・中期計画をたて、毎年、年度計画と年度報告を文部科学省に出しています。全学同窓会に関しても、大学の活動の中に、同窓会を支援して共同事業を行うことをうたっています。ホームカミングデイ、東京フォーラム、講演会、プロジェクト獲得など、多くの共同事業を続け、大学を支えるとともに、卒業生・修了生の役にもたつように活動を続けていきたいと思っています。

今後とも、全学同窓会が、大学と社会を結ぶ必須の組織として活動できるように、皆様の物心両面のご支援をお願いいたします。

## 支部・部局便り News from the Alumni Associations of Different Schools and Regions

部局や地域ごとの同窓会から寄せていただいた便りを掲載します。それぞれが全学同窓会と連携しながら活動しています。

Here you can find announcements and news from alumni associations of schools and/or regions. These associations and NUAL are cooperating with each other to everyone's benefit.

### 関東支部 NUAL Kanto Branch



東京フォーラムでの交流会

関東支部は、設立以来、学士会館内の名古屋大学東京連絡所を拠点にして、関東支部幹事会を頻繁に開催しております。幹事会には大学の幹部やプロジェクト担当のご出席を得て、大学と幹事との意思疎通を図るとともに、大学に対して提言しつつ、名大の関東地区のイベントに協力してまいりました。

11月7日（金）には、学士会館前の学術総合センターの一橋記念講堂にて、メインテーマを「新しい時代を切り開く人材の育成を目指して—名古屋大学が育てる勇気ある知識人—」とした第6回名古屋大学東京フォーラムが開催され、その成功に寄与しました。詳細は、本誌「大学ニュース」をご参照下さい。盛りだくさんな講演とパネルディスカッションは、関東地区での大勢の参加者に、名古屋大学の認識を深めさせてくれました。交流会にも多数の同窓生に参加いただき盛会になりましたこと、皆さまのご協力によるものと感謝しております。12月20日（土）には、ノーベル賞受賞の小林先生の祝賀会もあり、関東での名大の存在感も高まっております。

本年の活動のメインテーマは、以下の4点です。4月から名古屋大学の新体制に対応し、創立70周年を期して、より活動の明確化をはかっていきたいと皆様のご協力をお願いします。

①名大会（全学同窓会）の組織組み入れ、②ネットワーク構築の為の卒業年次別体制の確立、③関東支部の明確なる認知と名大本部とのLAN体制の確立、④基金募金の為の体制の確立。

■関東支部事務局長 片岡 大造

名古屋大学東京連絡所（学士会館内）

TEL: 03-5283-2575 Fax: 03-5283-2576

E-mail: kataoka@tokyo-office.sat.nagoya-u.ac.jp

### 関西支部 NUAL Kansai Branch



総会で講演する平野眞一総長

関西支部では、平成21年1月24日（土）15時から大阪弥生会館において、100人を超える同窓生を迎え、第4回総会を開催しました。総会では、笈哲男支部長（工・応化33年卒）の開会挨拶に続き、伊藤義人全学同窓会代表幹事から、昨年設立したカンボジア支部等の海外支部設立状況、学生活動や大学行事等を支援する「大学支援事業」、同窓会カード事業などの活動報告がありました。

引き続き行われた講演会では、名古屋大学広報ビデオやノーベル賞受賞者ビデオレター等を放映した後、平野眞一総長から「法人化後の大学運営」という演題でお話いただきました。平野総長は、本年3月末で5年の任期を満了されるということで、関西支部からご講演をお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。平野総長からはご自身の学生時代の体験なども交えて、5年間の大学運営についてお話いただきました。全学同窓会の7つの海外支部設立総会に全て出られたことにも触れ、今後とも留学生支援の必要性も述べられました。法人化後の大学運営に5年間ご苦労されたことがよく分かり、参加者一同感銘を受けました。

懇親会では、各同窓会の幹事から活動状況や近況などの報告があり、法学部同窓会からは、平成20年11月に法学部同窓会関西支部を設立したことが報告されました。参加者の方々からは、ノーベル賞受賞のお祝いの言葉とともに大学への激励の言葉もいただき、和気藹々のうちに会を終了しました。

#### お悔やみ

全学同窓会タイ国支部支部長の Neungpanich Sinchaisri 先生が、2009年2月12日ご逝去されました。享年74才でした。先生は、1978年に農学部博士課程を満了し学位を取得後、タイのカセサート大学教授として活躍され、1992年に発足した「名古屋大学タイ国同窓会」の会長、2006年からはタイ国支部長としても活躍されました。ご逝去を悼みご冥福をお祈りいたします。

## 法学部同窓会（名法会） Law (Meiho-kai)



10月4日（土）11:00～13:00、CALEフォーラムにて昭和30年卒（第5回）の同窓生を中心とした同期会（名法会）が開催され、26名が参加しました。この会は毎年この時期に行われているものです。今回は関谷崇夫氏の開会の挨拶にて始まり、まず全員で記念撮影を行いました。そして稲垣幸男氏の音頭にて乾杯を行った後、杉浦法学研究科長による法学部の近況説明、佐分副総長による大学の近況説明があり、参加者は名大の最近の動きに熱心に耳を傾けていました。会食の後で、それぞれが近況や当時の思い出を語り、和やかな雰囲気の中で会は進行しました。話は尽きませんでした。鈴木敬介氏の閉会の辞で今回の会を終了しました。名法会の幹事は毎年各ゼミが交代でつとめますが、今年は溪内ゼミが行いました。

## 情報文化学部・人間情報学研究科同窓会 Informatics and Sciences



2008年12月5日に、情報文化学部・同窓会主催の卒業生・在学生交流会が行われました。不況の中、主には在学生が卒業生から就職活動に関するアドバイスを受けられる場として企画され、当日は30名を超える卒業生、100名近い在学生と先生方にお集まりいただきました。当初はややぎこちない雰囲気でしたが、次第に卒業生の話に熱心に耳を傾ける在学生がいたるところで見受けられ、盛会のうちに終えることができました。ご参加くださった卒業生の皆様にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

## 農学部同窓会（セコイア会） Agriculture (Sequoia-kai)

農学部第5回卒業生（昭和34年3月卒業）のみなさんが、平成21年3月に卒業50周年を迎えられます。これを記

念して平成21年6月6日（土）に、農学部談話会にもご協力いただき、第5回卒業50周年記念祝賀会を開催するため準備を進めています。懐かしい先生方にもご参加頂けるかと思っておりますので、記念祝賀会へのご招待状が届きましたら、万障お繰り合わせの上、ご出席ください。第1回から第4回までの卒業50周年記念祝賀会の様子につきましては、農学部同窓会ホームページ（[www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/](http://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~dosokai/)）をご覧ください。来年は第6回卒業生をお招きする予定です。同日には、農学部同窓会総会、講演会、および懇親会を開催いたします。講演会は、2008年日本イノベーター大賞優秀賞を受賞された住友化学農業化学部門主幹の伊藤高明氏をお迎えし、「マラリア対策用オリセットネットについて」と題してご講演いただく予定です。講演会のみ、懇親会のみでもかまいませんので、お誘い合わせの上、是非ご参加下さい。

### ■連絡先

E-mail : [dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp](mailto:dosokai@agr.nagoya-u.ac.jp)

名古屋大学  
農学部同窓会  
セコイア会



## 国際言語文化研究科同窓会 Languages and Cultures



平成20年度の名古屋大学ホームカミング・デイ(10月13日)に合わせて、文系総合館のカンファレンスホールで、国際言語文化研究科同窓会の設立総会が行われました。

10年前に発足した本研究科は、在学生・卒業生を合わせて留学生の数が60パーセントを超えるきわめて国際的な機関であり、会員も東南アジア諸国を中心にして、中央アジア、南アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、ロシアといったように、全世界のかなりな部分をカバーしています。

設立総会にあたっては、著名な日本研究家である王敏氏をお招きして、「環境と自然そして人」という講演を行っていただきました。文化間の相違が文化間に反発ではなくむしろ共鳴を引き起こし、それぞれの文化を新たに触発させる現象が見られることを、ポップカルチャーを使いながら分かりやすく話していただきました。こうした説明は、同窓会設立の趣旨が、たんなる「会員相互の親睦」に終わらず、異文化共生を目指す「研究科の発展に寄与する」と深くかかわっています。

同窓会における共生の方針を明確にするために、昨年度に博士号を取得した修士生のなかから二名、またこの一年で最も活躍した卒業生のうちから二名の合計四名を選考

し、当日、「名誉修了生」として表彰し、研究内容の発表も行ってもらいました。在校生、とくに今年度、博士論文を執筆している会員にはとても刺激になったようです。

なお設立に先立って、こうした講演者・名誉修了生の要旨ならびに前年度のすべて博士論文要旨を研究科紹介冊子に組み入れて、配布しました。配布先は、在校生および300の研究機関と20箇所にあつたマスコミです。こうして、研究科の存在意義と同窓会の必要性とを、関係者だけではなく、一般にもアピールする形で展開しました。これによって「本会の目的に沿った事業活動」が、閉じた同窓会のための自己充足組織ではなく、外に向かって開かれた交流と外部からの評価に耐えるものにするという方向づけもできたように感じております。なお台湾の大学からは、冊子の「複製許可依頼」をもらうことになりました。

幸い、当日は、海外からの出席は難しいにもかかわらず、58名もの参加者があつました。ウェブ公開もしてあるこの冊子の購読者数も含めれば、ヴァーチャルにはこの数倍の参加者があつたと考えられます。

こうした会の設立が可能になったのも、全学同窓会からの支援金がいただけたこと、豊田章一郎全学同窓会会長からの丁寧なご祝辞があつたことでした。その篤い思いを受けとめて、次年度以降もさらに仕掛けと工夫をこらして、

有意義な同窓会としての芽を膨らませたいと思います。

■国際言語文化研究科同窓会事務局長 鈴木 繁夫

## 情報科学研究科同窓会 Information Science

情報科学研究科同窓会は2004年に設立され、今年で5年目を迎えます。2003年に情報科学研究科が創設されて以来、情報科学研究科を修了された正会員は約500名を数えます。

当会の主な活動は、会誌と名簿の発行と、卒業・修了記念パーティーの開催です。卒業・修了記念パーティーは、工学部情報工学系学科の卒業生で構成される名報会と合同で、年度末に開催しています。

研究科創設の翌年に当会が発足したこともあり、現在は主に博士課程後期課程の学生が中心となり、日頃の研究活動の合間を縫いつつ、運営をおこなっています。将来、当会を会員、在学生の方々の交流の場とするべく、いまは地道に礎を築いています。

### ■連絡先

E-mail : [alumni-staff@is.nagoya-u.ac.jp](mailto:alumni-staff@is.nagoya-u.ac.jp)

ホームページ : <http://www.is.nagoya-u.ac.jp/alumni/>

## 同窓会支援事業 NUAL Support Project

全学同窓会では、全学同窓会の活動理念に沿った名古屋大学の活動（学生支援、就職支援事業、本部・部局による行事・寄附講義等）への支援を目的として、平成16（2004）年度より、公募型の大学支援事業を開始しました。この事業は年2回募集を行い、選考にあたっては選考委員会を組織し、厳正に行っております。平成19年度後期の採択事業1件と平成20年度前期の採択事業4件について、担当者より報告いただきました。

NUAL commenced an open invitation type support project from 2004 for Nagoya University's activities (including student activities, employment support service, events and lectures) in harmony with the activity principle of the association. This project extends invitation twice a year and the Selection Committee is organized to implement a strict selection of activities. The following are summaries of the activity selected in 2008.

### グライダー再塗装費用支援

申請代表者：金井謙二  
(航空部主将 情報文化学部3年)

名古屋大学航空部の主な活動は、上空1500mの世界を飛び回ることと、そのための準備をすることです。今回の「グライダー再塗装」はその準備にあたります。

1997年に競技用の単座機として導入した当機ディスカスは、七大戦七連覇、2007年全国大会団体優勝など輝かしい成績を残してきました。しかし導入10年を経て、主翼全面に塗装クラックが発生し飛行性能への影響が懸念されるため、今回の再塗装に至りました。

再塗装後のディスカスは、誰もが「ピカピカ!」と言うほど美しく仕上がりに、飛行中の風切り音が減るなど飛行性能も改善



されました。長時間、長距離フライトをこのディスクで飛べると部員一同楽しみにしております。そして、このディスクで再び七大戦の連覇記録や全国大会優勝を目指し、日々訓練に励んでいきます。

さて、グライダーで空を飛び回る醍醐味を少しお話ししたいと思います。グライダーは動力をもたないため上昇気流を捕えて高度を上げていくのですが、これが目に見えないために実に難しく奥の深いところ。上昇流がどこにあるのか予想しながら探しに行くという挑戦と、限られた高度でいかに安全で効率よく探すかという作戦を常に考えながら空を飛ぶ、そこにグライダーの醍醐味はあると思います。また、グライダーと呼吸を合わせることも非常に重要で、自分が重力の変化を感じた瞬間に思いのまま操縦することが不可欠です。「あの積雲まで行きたい」と思っても、その手前には下降流が待ち構えていたり、機体の性能上届かないかもしれない、行ってはみたものの上昇流がないかもしれない。グライドを続ける中には、このような判断の連続が待っているのです。この文章で、航空部の活動及びグライダーについて少しでもご理解いただけたら幸いです。今後とも航空部へのご理解とご支援を宜しくお願いします。

## こすもす保育園

### ～遊びと学びの環境整備に向けて～

申請代表者：田中京子  
(こすもす保育園運営協議会議長・留学生センター准教授)



名古屋大学こすもす保育園は名古屋大学が運営する、教職員の子どもたちを対象とした保育園です。2006年春に開園し、現在30名の乳幼児たちが元気に通園しています。質の高い保育が評価されており、今年秋には60人規模の保育園になる予定です。

開園を前にした2005年、全学同窓会からミニログハウスを寄贈していただきました。園庭に置かれたログハウスは、子どもたちが出たり入ったり、おままごとをしたりする恰好の遊び場になってきました。しかし、3歳以下の子どもたちがほとんどだった開園時から数年が経ち、気がつくと子どもたちはログハウス

の入り口よりも背が高くなっていました。かがんで出入りする時に間違っても頭をぶつけても危なくないよう、安全策をとる必要があり、そんな状況を知った同窓会から、再度改良のための資金援助をいただけることになりました。おかげさまで現在では入り口に緩衝材をつけ、安心して使用しています。

また、図書コーナーを作り、子どもたちが日常生活の中で絵本を手にする環境を整えたい、お話会も開催したいという強い願いがありました。これについても同窓会から事業支援をいただくことができました。世界の平和や人々の優しさをテーマにした絵本が購入できることになり、図書コーナーは子どもたちが世界を広げ豊かな想像を育む大きな助けとなってくれるでしょう。

全学同窓会の諸先輩方が、子どもたちの学びや遊びの環境向上に力をかけてくださり、これによって大学構成員たちの研究や仕事が支えられているのは本当に心強いことです。皆様に支えられていることに感謝し、自分たちも大学のために貢献していきたいという気持ちを強くしています。こすもす保育園で学び育つ子どもたちの将来も、とても楽しみにしています。

## 日仏交流150周年記念祭(ストラスブール)にて 本学合唱団とストラスブール大合唱団の合同公演

申請代表者：野水 勉  
(総長補佐・留学生センター・ストラスブール大学窓口教員)



本学と学術交流協定を結んで活発な学術交流および学生交流を行っているフランス・ストラスブール大学及びアルザス日本学研究所、アルザス州政府の招聘を受けて、ストラスブール市で開催された日仏国際交流150年祭 Japan Week のために名古屋大学の混声合唱団が招待され、11月21日～29日の期間に、ストラスブール大の合唱団「ララシュ・クール」とともに計六回のコンサートを当地で行い、観客を大いに魅了しました。

特に、ストラスブール大学構内 (Palais de l'Université) やアルザス日本学研究所のあるキナー城におけるコンサートは、聴衆者に一般市民も多く、終了後、団員達は多くの歓迎を受けました。また、日仏国際交流150年祭の最後を飾る

コンセルバトワールのコンサートは、入れなかった聴衆希望者がロビーに溢れるほどで、様々なジャンルの曲を披露した後、「さくら」「ふるさと」等を「ララシュ・クール」と合同演奏し、満場の喝采を受けました。

本学の混声合唱団は、「名古屋大学混声合唱団」と「コール・グランツェ」の有志15名によって構成され、学生の渡航費用の一部について、本支援事業の支援をいただきましたことを誠に感謝いたします。本招待公演のきっかけは、一昨年11月に「ララシュ・クール」が来日して各地でコンサートを行った際に、本学の合唱団とのジョイント・コンサートの内容と歓迎に最も感激を受けたため、150年祭に向けて本企画が提案されたとのことでした。

このイベントを踏まえ、両大学関係者は今後も交流が継続していくことを強く願っており、引き続きのご支援にご理解いただければ誠に幸いです。

## 名古屋大学混声合唱団 第50回記念定期演奏会

申請代表者：山崎洋和  
(2008年度団長・教育学部3年)



同総会のご支援もあり、名古屋大学混声合唱団第50回記念定期演奏会は、現役団員、OB・OG、客演伴奏に来ていただいた愛知学院大学管弦楽団様、そしてご来場いただいたお客様と一体となれる演奏会となり、大成功のうちに幕を降ろすことができました。

今回は、合唱だけでなく演劇や照明変化なども取り入れたアトラクションステージにおいて、曲目にコミックソングを取り入れ、お客様にも参加していただけるような演出に挑戦したことで、過去に例を見ないユーモラスなステージとしてお客様にも楽しんでいただくことができました。

また、50回目の定期演奏会ということもあり、記念ステージとして、名古屋大学の入学式でも歌わせていただいている学生歌「若き我等」と、「鷗」という曲をオーケストラ伴奏付きでOB・OGと合唱しました。5回の練習と本番を通して、OB・OGからはかつての団の雰囲気や大学の様子をうかがう

こともでき、普段の活動では得られない経験ができました。また、その伴奏をしていただいた愛知学院大学管弦楽団の皆様にも、合唱と共演するという非常に貴重な体験ができた、今後もし機会があれば一緒に音楽がしたい、といった身に余るご感想をいただき、よい関係が築けたと自負しております。

学生だけで全ての活動を運営している名古屋大学混声合唱団ですが、今回の定期演奏会を計画、実行していくにあたり、新たなことに挑戦していくことは団員の中でも雰囲気がつかめず、戸惑いが生じるものだということがよく分かりました。お互いに、どんなコンセプトでやっていくのか、今の取り組み方は団の目指すべき状態なのか、ということをご共有しながら今後も活動していきたいと思っております。

## ホームカミングデイにて来客案内ボランティアが 着用する法被の作成補助

申請代表者：小畑直豊  
(名大際本部実行委員会委員長・理学部2年)

この度は、「ホームカミングデイにて来客案内ボランティアが着用する法被の作成補助」を全学同窓会支援事業に採択して頂きありがとうございました。

平成20年10月18日（土）に開催された第4回ホームカミングデイは、天候にも恵まれ大盛況のうちに幕を閉じました。同ホームカミングデイにおいて、全学同窓会に作成を補助していただいた法被を着用した名大祭実行委員をはじめとする名大生が、バスガイドや総合案内所での案内人として運営に携わり、ホームカミングデイの成功に微力ではありますがお力添えができたのではないかと考えています。

今回作成させていただいた法被は、来年度以降の名大祭で再利用させていただこうと考えています。1960年に学生自治の祭典として始まった名大祭も今年の6月で50回目を迎えます。50回という節目を迎える名大祭を、ホームカミングデイのように、名大生だけではなく地域の方から同窓生や保護者、老若男女様々な方々に楽しんでいただける「祭り」にできるよう努力していきたいと考えています。

## 活躍する会員たち NUAL People in Action

「活躍する会員たち」では、同窓会会員の各界におけるご活躍ぶりを紹介しています。第8回は、名古屋大学で留学生として微生物工学を学ばれ、現在タイでアミノ酸発酵や食物の安全管理などに関する分野でご活躍の Pichet Itkor さんにご寄稿いただきました。

This column “NUAL People in Action” features our alumni playing active roles in various fields. In this eighth issue, we have an article contributed by Dr. Pichet Itkor. In Thailand, he is now active in the field of amino acid fermentation and food safety management, and so on.

### Pichet Itkor さん (Dr. Pichet Itkor)



1989年名古屋大学農学部博士課程修了。農学博士。

2003年よりタイ生物工学会会長。

2007年よりタイコカ・コーラ社 科学および規制部門部長。

1989: Doctorate Degree in Biological Chemistry, Nagoya University Japan.

2003–Present: President of Thai Society for Biotechnology.

2007–Present: Scientific and Regulatory Affairs Manager, Coca-Cola (Thailand) limited.

I had not been familiar with Japan, neither the country nor people, until I came across with a visiting professor at Faculty of Science, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, where I did my bachelor and master degree. He has become my senior friend since then. The visiting professor, Dr. Yoshio Ishiguri from Tohoku University, by his behavior, very much impressed me to firstly know how a Japanese lives his life. And because of him, I later decided to do my doctor degree in Japan. I did pass the paper and interview test of the Japanese Embassy and finally was granted a Japanese Government Scholarship to study in Japan during 1986 – 1990. Again, with recommendation of Prof. Dr. Yoshio Ishiguri, I was able to start working with Prof. Dr. Shigezo Udaka at Fermentation Technology Laboratories <Baiyo Kougaku Kenkyuushitsu>, Faculty of Agriculture, Nagoya University.

To me, four years of being foreign student in Nagoya University ended up happily. I was able to work with such a renowned professor. I have got lots of friends and built up lots of networks. More than anything else, I am able to master the language, thanks to all the Japanese teachers in the Language Center of Nagoya University, NHK documentary programs and all of my Japanese friends. Meanwhile, four years of being a resident in Japan gave me a lot more of understanding on Japanese way of living, way of thinking and Japanese society as a whole. I really felt that those enjoyable times lasted too early. That was the reason why I decided to work with a Japanese company, Ajinomoto, right after my graduation.

There are several valuable conceptual thoughts of Japanese that I have learnt while being with Japanese friends in university and working with Japanese colleagues in Ajinomoto. Many of those are still alive and active in my day-to-day work, some of which I would like to share with the readers of NUAL Newsletter.

Firstly, “T-KATA” (Knowing everything of a specific something and knowing a little something of everything), the concept of having very deep knowledge in one’s own expertise with a little knowledge, but substantiated, of every area is inevitable when we have to get a job done. I personally believe that there is no any work on earth that requires only a single definite field of knowledge.

Secondly, the conceptual practice of “Small Group Activities” is a very powerful tool in every scale of company when change or new system has to be introduced or installed, even in a very big organization, like a country. Nobody would deny that the Total Preventive Maintenance and Total Quality Management are successful stories of Japanese firms using the concept of “Small Group Activities”. The practice is still visualized nowadays when GMP, HACCP and ISO system are being introduced.

Last but not least is “Keeping the Rule”. Japanese always spend a sufficient time on discussing and justifying why and how a rule has to be established. And when the rule is once adopted and put into practice, everybody will unconditionally obey and follows.

My career started by working as a fermentation engineer in Ajinomoto Co., (Thailand) Ltd. in 1990. The company is market leaders in the business of monosodium glutamate (MSG), feed-grade Lysine and ribonucleotides. I was later in charge of Technology and Engineering Center where about 130 scientists and engineers were working and reporting to me. The practice of “Small Group Activities” was always applied when we introduced a “Change” to the management system. During that period, I was invited by several universities to be their visiting lecturer on Amino Acid Fermentation Technology and I was also sitting in the working committee of establishing curriculums of Biotechnology in a number of universities.

In 1997, I have got an assignment as a manager of Scientific and Regulatory Affairs when I gained more exposure among scientific communities. This job assignment also helped me develop my technical communicating and negotiating skill in influencing the opinion and idea of the authorities based on sound science.

In 2007, I have moved to Coca-Cola Southeast and West Asia as a SEA Scientific and Regulatory Affairs Manager. According to company's need, my job was clearly expanded from "Biotechnology" to be more on food safety, food regulation and nutrition. And here, the importance of "T-KATA" was realized. I am still a biotechnologist, which is my expertise, but at the same time I have become a food technologist, toxicologist and nutritionist by training. I have been elected to be the president of the Thai Society for Biotechnology, which is a non-profit organization with the membership of 800 across the country since 2005. But I am also working collaboratively with International Life Science Institute Southeast Asia (ILSI) in addressing the problem of mal-nutrition and obesity among consumers. Being a part of both private sector and scientific communities, taking balance between the two roles not to generate any conflict of interest is challenging while respect of each organization's rule has to be seen.

With all those experiences that I have shared here, you may agree with me that what I had learnt in Japan, during the last period of my education, have been a backbone of



BioAsia 2008での記者会見の様子  
Press Conference for BioAsia 2008

my duality being survived in academic and business communities. Combining with experiences that I have gained working with a number of people, I anticipate to seeing these conceptual practices developing to a more advanced level and expanding also to daily life.

Thanks to *Monbukagakusho* for such a great opportunity given to me.

タイのチュラロンコン大学で客員教授をされていた東北大学の石栗義男先生とのご縁から、1986年から日本政府の奨学金を受けて名古屋大学農学部で培養工学研究室で鶴高重三先生のご指導の下で研究を始めました。名古屋大学での4年間は研究環境に恵まれて人脈も広がり、日本語や日本文化の理解もかない、卒業後は日本企業である味の素株式会社に就職することを決めました。

日本人の友達や同僚とともに過ごす間に学び、日々の仕事に現在も活かされている日本人の考え方のうち、いくつかを読者の皆様にご紹介します。一つ目は、自身の専門分野について深い知識を持つと同時に他の分野についても浅くとも広い知識を持って判断する「T型人間」という考え方です。二つ目は、新制度が導入されるなどの規模の企業や国家でも強力な手段となる「小集団活動」の考え方で、現在でもGMP、HACCPやISO制度が導入される際に見受けられます。最後は、“規則に従う”ということです。日本人は新しい規則がどういう理由でどういう方法で導入されるべきかについて時間をかけて議論し、採用された際には全員がそれに厳格に従います。

私がセンター長をつとめていた味の素タイ支店の技術工学センターでは、約130名の科学者と技術者と供に働きました。運営システムに「変化」を導入する際には常に「小集団活動」を実践しました。その間、大学からアミノ酸培養の講師として招かれ、生物工学の教育プログラムを設置する委員も勤めました。また、科学・管理部長に就任し、科学界での活動が広がったお陰で、健全な科学に基づいた機関の見解へ影響を与える技術的なコミュニケーションと交渉の能力が高まりました。

2007年、私はコカ・コーラ東南・西アジア社に転勤し、科学および規制部門部長として勤め始めました。私の仕事は生物工学からより幅広く食品の安全、管理、栄養に拡大され、T型人間であることの重要性に改めて気づきました。私の元々の専門は生物工学でしたが、食品管理学者、毒物学者、栄養学者にもなりました。また、2005年にはタイ生物工学会会長に選出され、栄養不良と肥満の問題で東南アジア国際生命学研究所 (ILSI) と共同で仕事も行っています。民間企業と科学界双方の一部となって、個々の規則を尊重しつつ利害衝突を避けるよう役割のバランスをとることはやりがいのある仕事です。

このように民間企業と科学界の双方にまたがって仕事を行えたのは日本で学んだことのお陰だとおわかりかと思えます。これらの考え方の実践がさらに向上し、日常生活にも広がることを期待しています。

素晴らしいチャンスを与えて下さった文部科学省に深く感謝の意を表したいと思えます。



## ■次期本学総長候補者に濱口道成医学系研究科長・教授が選出される



記者会見をする濱口教授

平野眞一総長の任期が平成21年3月31日をもって満了することに伴い、名古屋大学総長選考会議は、10月5日（日）、次期総長候補者の選考を行い、濱口道成医学系研究科長・教授を次期総長候補者に決定しました。

濱口研究科長は、総長選考会議後に行われた記者会見において、「地球温暖化、資源枯渇、超高齢社会等の問題を抱える時代を迎えているが、日本の資源は人間しかなく、日本の未来を切り開く人材を育成できる大学として発展させたい」、「国際的な評価に堪えうる教育を進めること、学生が自己変革を図れるチャンスを提供することを考えていきたい」、「人文科学や宇宙・生命の本質の解明などの長いスパンで日本を支える人材の育成が弱くなっており、基幹大学としてそういう分野も守っていきたい」などと抱負を語りました。

なお、新総長の任期は、平成21年4月1日から平成27年3月31日までの6年間となります。（名大トピックス No. 186より）

## ■第4回名古屋大学ホームカミングデイ —地域と大学で考える「人と地球環境」を開催—

第4回名古屋大学ホームカミングデイが、平成20年10月18日（土）、東山キャンパスにおいて、全学同窓会との共催により開催されました。

今年度は、“地域と大学で考える「人と地球環境」”をメインテーマに、地域貢献を目的とした教育・研究活動の紹介や本学構成員との交流の場の提供、各部局同窓会行事等が行われました。当日は、同窓生、学生のご家族や近隣住民の方々を中心に、これまで最高の4,500余名もの参加者があり、来場の記念品として名大ロゴマーク入りのペットボトルホルダーが配布されました。

本学の卒業生である益川・小林博士、元助教授である下村博士の2008年ノーベル賞受賞決定（2-3ページを参照）を記念し、急遽、豊田講堂2階の展示室においてパネル展示が行われ、在学時の貴重な写真や博士論文、今回の受賞理由となった研究が紹介されました。受賞発表直後の多忙

な中、益川博士と小林博士からは来場者に対するビデオメッセージが、下村博士からは電子メールによるメッセージが寄せられました。メッセージは豊田講堂ホワイエ階段前において披露され、来場者の注目を浴びていました。



ノーベル賞展示会場の様子

また、今回の目玉の一つとして、読売新聞社とNHKが主催するノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「21世紀の創造」20回記念科学フォーラム名古屋が豊田講堂において開催され、「地球環境問題—ノーベル賞科学者からのメッセージ」をテーマに、物理学賞を受賞した江崎玲於奈横浜薬科大学長、化学賞を受賞したドイツのパウル・クルツェン マックスプランク研究所名誉教授、野依良治特別教授・理化学研究所理事長の3名を基調講演者として招待し、コーディネーターを異物質科学国際研究センター長が務めました。参加した本学関係者や市民の方々など約950名は、ノーベル賞受賞者が目の前で繰り広げる議論に最後まで熱心に耳を傾け、地球環境問題への関心を高める契機となりました。

当日の運営には学生も加わり、名大祭本部実行委員会や陸上部、サッカー部、ラグビー部をはじめとする体育会、また、環境サークル Song Of Earth に所属する多くの学生の協力のもと、教職員と力を合わせて総合案内、会場整理などにあたりました。多くの来場者には、この活動と、広い会場を巡回するシャトルバスが非常に好評で、これからも続けてほしいと言っておられました。（名大トピックス No. 186より一部要約）



会場を巡回する無料シャトルバス

## ■第15回博物館企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」を開催

博物館は、10月7日（火）から11月8日（土）まで、博物館2階展示室において、第15回企画展「伊吹おろしの若者たち―八高創立百年の歴史から―」を、大学文書資料室との共催により開催しました。

これは、本学のルーツのひとつである第八高等学校（八高）が今年創立100周年を迎えるのを記念し、八高がたどった長い道りを学生生活に焦点をあてて振り返るために企画されたものです。当時の若者はなにを学び、なにに悩み、どんな青春をおくったのかを明らかにすることによって「八高文化」を若い世代に伝えるため、パネルも写真を中心に展示しました。また、実物展示として、本学に寄贈された多数の関連資料から、当時の学生服、教科書、卒業証書等、選りすぐりの約60点と、名古屋市博物館所蔵の約10点が展示され、展示図録やパンフレットも無料配布されました。八高会（第八高等学校同窓会）の支援により、一層充実した展示となりました。

期間中の来館者は、八高100周年記念祭の一環として開催された八高会主催のバスツアーで博物館を訪れた約80名を含め、2187名に達しました。（名大トピックス No. 187より）



企画展の様子

## ■第6回名古屋大学東京フォーラムを開催

第6回名古屋大学東京フォーラムが、11月7日（金）、東京都千代田区の学術総合センター―橋記念講堂及び中会議室において開催されました。

今回は、人材育成に焦点を合わせ、「新しい時代を切り開



パネルディスカッションの様子

く人材の育成を目指して―名古屋大学が育てる勇気ある知識人―」をテーマに、本学における教育研究活動を通じての人材育成に関する取り組みを中心に情報を発信し、社会の理解と支援を得るとともに、今後の人材育成のあり方について提言、助言を受けることを目的としています。会場は約430名の参加者でほぼ満席となり、本学の教育研究に対する関心と期待の大きさが伺われました。

基調講演などに続いて行われたパネルディスカッションでは、馬場総長補佐が進行役を務め、川端和明文部科学省科学技術・学術政策局基盤政策課長、鈴木克明株式会社フジテレビジョン取締役編成制作局長、西山徹経団連産業技術委員会産学官連携推進部会長・味の素株式会社技術特別顧問、平野総長の4名のパネリストにより、人材育成について忌憚のない意見交換が行われ、会場の参加者も熱心に聞き入っていました。



基調講演を行う野依良治特別教授



講演会場の様子

講演会場に併設された展示会場では、2008年ノーベル賞受賞が決まった小林誠博士、益川敏英博士、下村脩博士等、本学とノーベル賞に関するパネル展示や、「本学の人材育成の取り組み」及び「グローバル COE プログラムの各拠点の活動概要」に関するブースが設置され、多くの来場者が足を運びました。

また、フォーラム終了後に行われた交流会では、本学同窓生を中心に集まった多数の参加者のもと、平野総長、齋藤デンソー会長からあいさつがあり、久保公人文部科学省大臣官房審議官の発声により乾杯を行った後、会場の各所で交流が深められました。最後に、杉山理事から閉会のあいさつがあり、盛況のうちに終了しました。（名大トピックス No. 187より）

# 「名古屋大学カード」から始まる大学支援

年会費永年無料！

加入者は、3,000人を超えました。



全学同窓会では、大学支援を強化するため、「名古屋大学カード」事業を行っています。

「名古屋大学カード」は、UFJゴールドカードと同等の機能\*を持ち、年会費は永年無料です。

「名古屋大学カード」を利用されますと、その一部が手数料として全学同窓会に還元されます。全学同窓会では、その還元金を大学支援（学生活動支援、就職活動支援、行事支援）の事業に充当し、研究・教育活動に役立ててもらおうこととしております。是非、ご加入ください。

\* UFJゴールドカードとは一部異なる特典がございます。詳細は申込書をご確認ください。

全学同窓会ホームページ (<http://www.nual.nagoya-u.ac.jp>) から申し込むことができます。

## 事務局からのお知らせ From the NUAL Office

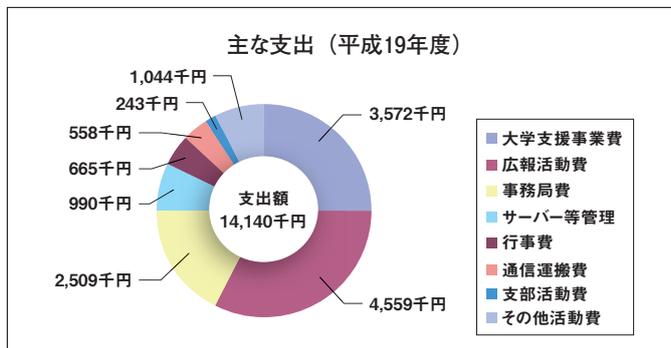
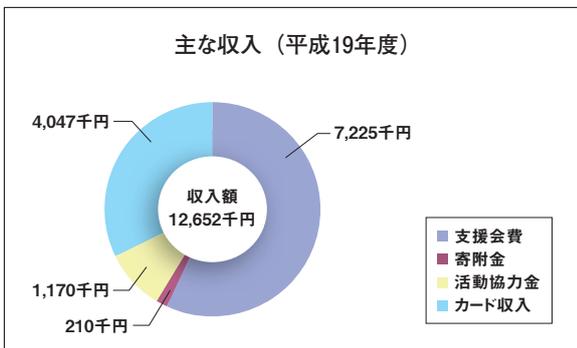
### ●支援会費のお願い Call for contributions

名古屋大学全学同窓会の活動は、皆様からの支援会費、寄附金に支えられております。支援会費は年度ごとのお支払いとなります。皆様のご協力をお願いします。

- 支援会費 Supporting Fee 支援会員 Supporting member : 一口 5,000円  
支援法人会員 Supporting institution : 一口 50,000円

- 支払い方法 郵便振替 Post Office Account 口座番号：00860-8-113043  
自動引落 利用ご希望の方に、預金口座振替依頼書をお送りします。関係書類をご入用の場合は、同窓会事務局にご連絡ください。

支援会費、活動協力金等は、大学支援事業や広報誌作成等全学同窓会の設立理念に合致する活動に使わせていただきました。



### ●住所等の登録・変更について NUAL member registration

全学同窓会では名古屋大学と連携して会員の皆様の連絡先等を整備し、大学及び全学同窓会からの情報発信等を行っています。住所等の変更があった場合は、同窓会事務局に電子メールまたはFAXでご連絡下さい。

個人情報、社会貢献人材バンクとして全学同窓会および名古屋大学の活動に利用しますが、個人情報は本人の承諾なしに公表されることはありません。最新の会員情報が得られますよう、皆様のご協力をお願いいたします。

### 名簿商法にご注意下さい!

全学同窓会、および、支部・部局同窓会とは関係のない組織から連絡があり、“○△学部卒業生の名簿を作成しますのでご協力を”などと語って住所を聞き出したり、名簿作成料の名目で代金を請求されたりする場合があります。不審な場合は先方が正規の組織かを必ずご確認の上、慎重にご対応下さいますようお願いいたします。

## 編集後記

小林・益川・下村先生のノーベル賞受賞決定の知らせから早半年弱、学内ではノーベル賞に関連する行事がたくさん行われました。その様子が少しでも伝われば幸いです。また、平野総長へのインタビューでは、海外支部総会へのご出席などを通して描かれた同窓会のあるべき姿が、会員の皆様に伝われば幸いです。今後も皆様のご支援どうぞよろしくお願いいたします。

(全学同窓会広報委員会)

NUAL Newsletter No.11 平成 21 (2009) 年 3 月発行

Nagoya University Alumni Association

**NUAL 名古屋大学全学同窓会**

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL/FAX 052-783-1920

E-mail [nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp](mailto:nual-jimu@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

ホームページ <http://www.nual.nagoya-u.ac.jp/>

編集：名古屋大学全学同窓会広報委員会